

書 評

北 原 勇

『独占資本主義の理論』

有斐閣 1977.1 418 ページ

[1] 本書は、北原氏が「独占資本主義の基本的特質——独占価格支配・独占利潤収奪——」の分析から出発して、独占段階固有の社会的総資本の蓄積＝拡大再生産の運動・矛盾の展開の総体を解明する」という問題意識にたって過去20年間に行なってきた独占資本主義研究を集大成したものであって、第1篇「独占資本主義の構造的特質と独占価格・独占利潤」、第2篇「独占企業の投資行動」、第3篇「独占段階における社会的総資本の蓄積過程」からなる体系的な独占資本主義論である。わが国の従来の独占資本主義の理論的解明は独占価格や独占利潤を静態論的枠組のなかで論ずる傾向が強かったのに対して、北原氏は資本蓄積や技術革新などの動態的要因を理論の中軸にすえ、独占資本主義の「停滞基調」とそのもとでの一時的間欠的「発展」を説く(第3篇)。この視座は独占資本主義の理論的解明にとって決定的に重要であり、また独占資本主義の「停滞基調」が論証されれば、北原氏が第3篇の後半部分で行なっているように、対外膨張や国家独占資本主義への移行の説明が容易になる。北原氏が独占資本主義論の中軸的論点に焦点をしばったことは高く評価されてよい。今後の独占資本主義研究は、当然氏の問題提起に刺戟され、氏の研究成果に大きく影響されて進められてゆくであろうと思われる。それゆえにこそかえって、氏の「理論」展開の問題点を指摘しておく必要があるように思われる。

[2] 北原氏は、資本主義の「一般理論」は「頑強な必然性をもって作用し自己を貫徹してゆく必然的傾向＝法則性」を対象とするのに対して、独占資本主義の「理論」は「蓋然性の高いとみられる傾向の発見」であるという。独占資本主義は「必然性の論理」では解明できないことは当然であり、評者も同じ見解をとる。問題は「蓋然性の高いとみられる傾向の発見」を如何なる論理的手続きで行なうかということであり、氏の手続きを一般的な形で述べればつぎの如くである。(1)問題とする事象の生起するケースを網羅的形式的に分類する、(2)各ケースについて仮言的命題を定立する、(3)独占資本主義の構造的特質を考慮して上記の仮定的命題あるいはその結合結果から「蓋然性の高いとおもわれる傾向」を

発見する。この点を本書第2篇「独占資本の投資行動」を例にとりていまいし具体的にのべてみよう。

本書第1篇で北原氏が主張しているもののうち以下の議論と関係するのは、(1)独占資本の投資の「予想限界利潤率」が「投資基準利潤率」よりも高ければ投資が行なわれる、(2)独占資本は参入阻止要因として「余裕能力」を保有するが、「意図されざる過剰生産能力」の発生は極力回避する、(3)独占資本は需要の実状や趨勢について「かなりの確な把握ができる」の3命題であって、これらを前提として第2篇「独占資本の投資行動」が展開されるが、第2篇の分類規準は、市場拡大の有無と新生産方法導入の有無の2つである。そして新生産方法の導入がないばあいには、市場が停滞的であれば独占資本の投資行動は慎重となり、それが拡大的であっても、新生産方法導入のばあいに比して独占資本の投資行動の展開は「弱い」ことが確認され、新生産方法の導入があるばあいには、市場が停滞的であれば「独占部門では、新生産方法の導入は競争的市場におけるばあいよりも遅延せしめられる傾向が強い」とされ、市場拡大のばあいには、新生産方法の導入は強力におし進められるが「『意図せざる過剰生産能力』が生みだされるという傾向は、競争市場におけるよりはるかに強力に現われる」という。以上は北原氏もいうように「ある与えられた市場の条件のもとでの独占企業の投資活動」であって、「与えられた市場の条件」のなかに結論が含まれている trivial な関係を導出したにすぎない。このために本書の50ページをさかねばならぬ理由は評者には推察しかねるが、重要なことは第2篇全体が独占資本の投資行動の「慎重性」を確認することを目的としているということであり、そのための装置が、上述のような分類規準と仮言的命題であるという点である。このような議論の組立て方自体が評者にはまったく疑問であるが、この点はさらに第3篇の議論ではより深刻となる。

[3] 本書第3篇の大きなテーマは、独占資本主義の「停滞基調」の証明と、新生産部門形成による一時的間欠的「発展」の説明である。北原氏の発想の特徴をみるためには「停滞基調」はまず前提として後者からみるほうが理解しやすい。

北原氏は「巨大独占企業によって開拓される新生産物は、その性質上、新しい独自の技術体系にもとづいて、独自の生産設備によって大規模生産される傾向が強い」という判定から出発するが、新生産物および新生産部門についてのこの特定化のなかに氏の一時的間欠的な「急激な経済発展」論のすべてが含意されている。すなわち、

そのような新生産物が「相前後して出現」し、新生産部門形成が大規模に行なわれるならば、まさにそれは「独自の労働手段体系において生産される必要がある」ために、社会的スケールでの産業連関効果をもち、「停滞基調」を「一転」させ「社会的総資本の拡大再生産の急激な進展が出現する可能性がある」と北原氏はいう。これも典型的な仮言命題であって、新生産部門についての氏の特定化を認めさえすれば、そこに「急激な発展の可能性」があるということ自体は trivial なことであって、別に異論を必要とする性質のものではない。だが問題なのは、氏が新生産部門を上述のように特定化したとき、氏の議論の枠相のなかでは、「独自の労働手段体系」をもって大規模生産を行なうのは新生産部門だけに限定されてしまい、それだけが「急激な経済発展」の起動力にされてしまう点である。ここで限定された対象についてだけ成立する仮言命題が一般的に通用する肯定命題にすりかえられるのである。

独占資本主義の「停滞基調」の説明は、まさに「基調」が問題であるために、このような仮言命題や「蓋然性」論では不十分である。事実氏はこの部分に関しては一定の logic を用意する。独占資本主義の「停滞基調」の論証は独占資本主義分析の長年の宿願であって、バランとスウィージーは高められた経済余剰生産能力とその吸収能力のギャップから、また大内力氏は恐慌からの自動回復力の喪失からそれを説明しようとして試みたことは周知の通りであるが、北原氏は「独占部門における『余裕能力』の存在と独占企業固有の慎重な投資行動とによって、それ〔ある独占部門での設備投資〕が関連諸部門の設備拡張投資を誘発し、設備拡張投資を媒介とする市場の加速度的相互拡大を惹起してゆく機構が麻痺する」ことから独占資本主義の「停滞基調」を論定する。この点が北原理論のかなめであるが、その論証はできていないように思う。北原氏の「切り符」はいつでも「余裕能力」であって、それは、第1篇では参入阻止要因として、需要の一時的あるいは循環的変動のパッファとして、そしてここでは「停滞基調」の説明要因として登場する。「余裕能力」が一体このような説明要因たりうるのだろうか。この間に肯定的に答えるためには、少なくとも、個々の独占資本が保有することを合理的とみなす「余裕能力」の規模が独占資本主義下の可能的な需要(市場)拡大の規模よりも大きいということが定量分析的に明らかにされねばならない。この点の論証をぬきにして「余裕能力」を「停滞基調」に結びつけるのは、一種の連想ゲームでしかない。氏のこの議論に対しては、氏がバラン

やカレツキーに対してなした「再生産構造論的視角がない」という批判がそのままではまる。氏もいうように「個々の部門における価格決定や投資行動の特徴にかんする理論と社会における経済発展の理論を結びつける媒介環となるものこそ、まさに再生産構造論的視角であるはずである」が、氏の「停滞基調」論ではその媒介環がすっぽりと欠落しているからである。

[4] 残念なことに、本書では他にも理論的展開の弱さが目立つ。ここではその1例として、著者と評者の間での長年の係争問題であった「観念的範疇としての生産価格」の有効性についての北原氏の新展開をとりあげよう。氏は「剰余価値の不平等な分配とは、総剰余価値の『平等分配』=平均利潤を前提とし、それを基準にしなければ成り立ちえない概念」であると確信し、「競争が全面的に支配したばあいには実現されるであろう『平均利潤』を超えて獲得される超過利潤こそがまさに『独占利潤』である」として、4つの設例をあげて、独占価格が成立したばあいと利潤率の平均化作用が貫徹したばあいを「対比」して、独占利潤は非独占の平均利潤からの収奪・移転であることを説明しようとしている(第1篇第4章)。氏の設例は恣意的であり、叙述は不必要に難解であるが、要するに北原氏がここで行なおうとしていることは、独占産業と非独占産業とからなる経済で独占価格が設定されてそれが他産業の費用価格に入りこんだばあいの独占・非独占産業の利潤量の変化の確定である。この種の議論は、転化問題で開拓された手法を用いればもっと一般的かつ明快に解けるはずであるが、北原氏は転化論の成果を摂取しなかったために、独占価格の費用価格化が行なわれても利潤総額は生産価格が支配しているばあいの平均利潤と同じであるというまちがった結論に到達している。このことは、氏ははっきりとマルクス転化論における総価値=総生産価格一致命題を否定しているし、単純再生産を仮定していながら非独占部門では資本移動が行なわれ、部門構成は変化するとしているがゆえに、ますます不可解である。かりに剰余価値総額は同じであっても、生産価格体系と独占価格体系とではその評価が異なるのであって、価格表示された利潤を両体系において、量的に比較することは理論的には意味がないのである。

要するに、鋭い鮮明な問題意識と論証の決定的欠除、これが本書についての評者の卒直な読後感である。

〔高須賀義博〕